トリニティー体験テキスト　郷土の歴史編

『工楽松右衛門物語』

（くらくまつえもん物語～海運界の革命児・「世のために」一筋の人生）

はじめに

この『工楽松右衛門物語』を読まれるジュニアの皆さんへ

江戸時代は帆船輸送が主で、主人公の工楽松右衛門は、「松右衛門帆」を発明し、大量輸送、スピード輸送を可能にしました。現在、港の工事で使われている特殊作業船（土砂積み船、ろくろ船、底捲き船など）も数多く発明しました。

しかも、その技術を惜しげもなく公開し、世の中の発展に尽くしました。しかし、「世のために」を最優先したために、自分の功績を誇ることがなく、その一生を閉じました。海運に関係する同時代人からは非常に高い評価を受けていましたが、明治中期になり、鉄道を主体とした陸上輸送に代わり、海運を発展させた松右衛門は一部の研究者以外には忘れられた存在になりました。

作家の玉岡かおるさんが『帆神（ほしん）～北前船を馳（は）せた男・工楽松右衛門』を書き、神戸学院大学教授の松田裕之さんが『工樂松右衛門伝～公益に尽くした七〇年』を書かれたのも、一、二年前の話です。

工楽松右衛門に関する研究自体が発展途上にあります。まして、松右衛門の人柄を描写するものは、ごくごく限られています。というより松右衛門と同時代の江戸時代の農学者である大蔵永常（おおくらつねなが）が書き残した『農具便利論』以外は、ごくわずかしか見られません。

そこで、この偉人の伝記を書くにあたって、想像をふくらませて書くといった方法を取らず、分かっていること、当時の時代背景から推測できることを中心にこの伝記を描き上げることにしました。

工楽松右衛門に関する大人向けの講演会でも「世のために」生き切った松右衛門を、パワーポイントを使って講演していますが、成し遂げたことを中心に、そこから人物像を推定する方法を取るしか仕方がないのです。

これほどまでに海運界の発展に寄与した人が、「世のために」一筋で生きた人が、私の住んでいる町で生まれ、人生を終えていったことに、その出会いに深く感謝します。この出会いがなければ、この伝記を書くことは無かったのですから。

私の本来の仕事と定めたのは心理カウンセラーですから、その関係の講演、活動に進むはずでした。そのため用の名刺しか作っていませんでした。

出会いというものは、人の人生をも大きく変えるものです。皆さんが、工楽松右衛門という偉人を知って、その出会いから、人生を考え、開くきっかけになればと願っています。

（注）工楽松右衛門と名乗ることになるのは満五十九歳の時ですが、この主人公を一貫して描くために「工楽松右衛門」「工楽少年」「工楽青年」「工楽船頭」「工楽」「松右衛門」と呼びます。

一　工楽松右衛門誕生

寛保三（一七四三）年、高砂町の漁師・釣屋善三郎の息子として、それは、それは大きな赤ちゃんが生まれました。あまりにも大きく産婆さんをはじめ、当時、生まれた戎町周辺でも有名になりました。そのために、当時の人々は高砂神社の「牛頭（ごず）天王」の生まれ変わりかと、ささやきあっていました。その大きな赤ちゃんこそ、後年、工楽松右衛門と名乗る海運界を大きく変えた人物でした。

高砂は、慶長一七（一六一二）年、姫路藩主の池田輝政の命により、現在の高砂神社の地に高砂城が築かれ、中村主殿助正勝が城主になりました。城の周りは武家屋敷、町人屋敷で取り囲まれ、その周りを東は高砂川、南は瀬戸内海（明治時代に命名）を利用はしていましたが、北西は人工の堀で囲まれていました。築城三年後、元和元（一六一五）年に、一国一城令により、お城が取り壊しになり、本田忠正の手により高砂神社が元の位置にかえりました。そして町人町（まち）に編成し直しました。その時に加古川対岸の尾上町今津の住人を、免税措置をもって、高砂の今津町に呼び寄せています。高砂は人工的な町割りにより碁盤の目になっています。

工楽松右衛門少年（以後、工楽少年）は大柄で丈夫な身体を持ち、他の少年とは異なる聡明な少年に育ちました。

工楽少年は、もの心がつく前から、船の中で遊んでいました。また、小さい頃から漁師の父親の船に乗って漁に出ていました。その当時、瀬戸内海は生まれた戎町の目の前に広がっていました。高燈籠（たかどうろう・当時の灯台）が家の目の前にありました。その当時の高燈籠が、今、高砂神社の境内に納められています。ですから遊ぶのも海、働くのも海でした。

父親の「お前、ここに網を張っとけ。」「ここに大きな岩があるから網上げの時に注意せいよ」「網の繕いはこっちから仕上げていけ」「船虫はこうして取るんだ」等々、父親より様々な指示があるのですが、工楽少年はやすやすと理解し、また手先器用に修理していきました。また、人並外れた体力があり、十歳ごろには、既に大人と同じ働きをするようになりました。工楽少年は大人になってからの体格は相撲取りに匹敵すると言われています。幼少の時から、当時の大人より大きく、一目で我が子と分かる工楽少年は父親にとって自慢の息子でした。

また、工楽少年は父を超えるものを持っており、同時代の記録に「魚を釣る糸の手応えだけで、かかった魚の種類が、いつのまにか分かるようになり、また時節時節の魚の群れる場所も知るようになった。狙いをつけて網を打つと、それが外れることがなかった」と書かれています。そのように彼は何事につけても、幼い頃から旺盛な探求心と創意工夫することが好きでした。ところが、他の子ども達とはなじみませんでした。子ども達が工楽少年を理解するには幼すぎました。

それは物事に集中すると、船の上に一日いても飽きず、じっと海を見て観察したり、家の船の修理

倉庫や、前庭に道具を持ち出し、いろんな工作をしたりしていました。そこまでの集中力は同年代の子ども達には理解できなくて当たり前だったのです。

工楽少年自体は、強い気性を持ち、船板一枚地獄と言われるために迷信深い漁師とは異なり、合理的な理解の仕方をしていました。後年、そのこと発揮するにおいて作家・司馬遼太郎氏は松右衛門を高く評価をしています。

周りの大人からは、子どもながら成果を出すので、一目も二目もおかれていました。工楽少年にとっても大人相手の方が、自分を満足させるものでした。それは子どもの域を超えており、子ども達には理解しがたかったのでしょう。

父親は周りからほめられるので、嬉しい半面、工楽少年の将来を考えるようになりました。

父親「自分の息子ではあるが、鳶（とび）が鷹（たか）を生むように自分の息子であって、息子とは思えない才能を持っている。この子の将来を考えた時、どうすることが親としていいのか」「漁師の才能はあるが、見ていると漁師に満足しない、遥かにそれを超えた考え方をしている」

母親「私の腹を痛めた我が子です。漁師の子として生まれたのなら、漁師を生業（なりわい）として、一生を通させてやりたい。それがこの世の道理です。」

こう父母で思案している間に、工楽少年の運命を変える大きな出来事が起きることになります。その非情とも思える運命が未来の日本全国から慕われ、信頼される「工楽松右衛門」を作ることになりました。しかし、それは後年の話です。人の運命は分からないものですね。

二　工楽少年、養子として宮本屋に

工楽少年の家の近くで、高砂町東宮町に工楽少年の実家の釣屋善三郎家より遥かに大店（おおだな）で羽振りの良かった宮本屋長三郎家がありました。当時武士以外は名字帯刀（みょうじたいとう）が許されていませんでしたから、工楽少年の実家の釣屋にしても、宮本屋にしても屋号です。ただし、当時の記録を見てもあまり気にせず「宮本」として使っています。

その宮本屋がさかのぼる寛延二（一七四八）年一月十七日、工楽少年満五歳の時に、加古郡西条村（現稲美町）の農民五千人が凶作のために、税の免除・税の延納を求めて一揆（いっき）を起こしました。その一揆が二月初旬には広い範囲にも及ぶようになり、二月六日には高砂町蔵役人「宮本屋長四郎」宅が打ちこわしにあいました。名前を見てもらっても分かる通り、宮本屋長三郎の弟だと思われます。このことは宮本屋が蔵役人を出すほどの大店の一族であることが分かります。工楽少年もこの大事件を見ていました。というより高砂どころか、この地域一帯がこの大事件で、揺れ動いていました。

その大事件が、意外な方向に向かって、工楽少年に働きかけていきます。そのことが工楽少年の運命を大きく変えることになりました。

宮本屋長三郎・カチ夫妻は、民衆の怒りの矛先になった宮本屋の汚名返上と宮本屋の再興を図

ろうとするのです。自分たちにも既に子どもがいました。その子が後年に工楽松右衛門の仕事における右腕になるのですが、これも後の話になります。歴史というのはあざなえる縄の如く展開していきます。宮本屋夫妻が目を付けたのが、高砂町内で賢いことで評判であった釣屋善三郎の息子、つまり工楽少年だったのです。

当時、高砂町は今では信じられないほどの繁栄していました。兵庫一長い加古川の舟運、瀬戸内海の海運の交わる地点にあり、幕府のお米、諸藩のお米も含め、百間蔵と言われるまでの大きな米貯蔵庫が並び、繁栄と、それに伴う文化の宝庫、情報の宝庫となっていました。工楽少年もその文化の恩恵を受けていました。ですから、たまたま高砂から世を動かす工楽少年が出たのではなく、文化的な土壌があり、その土壌から夢を持ち、常に工夫を考える少年が誕生したのです。

釣屋の工楽少年の父親も、自慢の息子であると同時に、自分を超える才能を持った息子をこのまま漁師の息子にしておくのはどうかと、心が定まらないまま悩んでいました。

そこに宮本屋長三郎夫妻から養子縁組の申し入れがありました。工楽少年に何人兄弟がいたかは分かっていません。分かる範囲で推定すると工楽少年は長男だった可能性があります。その状況の下で、工楽少年の父母、釣屋家は大いに悩みました。高砂神社の側に位置する宮本屋は格式の高い家で、兄弟衆の一揆の取り壊しに遭うということがなければ、そのためのお家再興ということがなければ、話があるはずのない関係なのです。

最終的に工楽少年は宮本屋に養子で行くことになりました。息子の将来を思う父親の愛が、我が子を思う母親の愛を乗り越えました。それでも我が子を手放すためにどれだか悩んだかは図り知れません。親というのはそういうものです。それが工楽少年十二歳の時でした。江戸時代という背景を考えると、大人とみなされる年齢でもあったのです。その時の工楽少年の思いはいかばかりかと思います。決して良かった、ハッピーと言えるものではなかったと思います。皆さんも自分の身に当てはめて考えてみてください。分かると思います。

ただ、このことが工楽少年の未来を切り開く元を作ります。実家を離れることはとんでもなく悲しいことだったとは思いますが、そのことにより、海運界の偉人である工楽松右衛門が誕生するのです。逆境が負けないで、勝利の人生を築くことになりました。人の運命は分からないものですね。

三　工楽少年の苦（にが）い旅立ち

宮本屋の養子となった工楽少年は宮本屋で可愛がられました。大事なお家再興を担う息子としての教育や行儀等を教わることも多くありました。高砂の大店ゆえに、当時兵庫の中で、最も繁栄していた兵庫津（今の神戸市兵庫区）とも取引がありました。宮本屋は手持ちの船を複数持ち、江戸までの廻船と、当時、流行していた金毘羅参りの船を仕立てていた廻船問屋でした。ですから、工楽少年の周りの人の動きもそれだけ広範囲に活発でした。実家の漁師とは違い、商いの分野で宮本屋は高砂を拠点に幅広く動いていました。

聡明な工楽少年は宮本屋にいて、そこで学ぶことに関しては努力を惜しみませんでした。しかし、自分の好きなことからいえば、創意工夫で物事を成し遂げることにあり、商売にはあまり向いていない自分を感じていました。宮本屋に来てから幅広い情報に接し、兵庫津にも出かけることがあり、見分を広めていきました。特に兵庫津では大小様々な船が自由に出入りすることができました。

高砂湊（みなと＝港）は、高砂川の上流部の沿岸にしか船を停泊することができないので、停泊できる船の大きさ、船の量に限界がありました。それに伴い商売にも自ずと限界がありました。それでも海上交通の要所として栄えていました。

また、大きな河川を持つ港は、その河川ゆえに舟運で栄えます。ところが、どことも苦しむことになるのが、川から大量の土砂が流れ込んでくることです。その浚渫（しゅんせつ・土砂をさらうこと）にどうしてもお金がかかるのです。そのことは工楽少年の頭には故郷高砂と高砂湊、川の浚渫はセットになって思い浮かぶことでした。そのことは工楽少年が成長し、その最晩年に解決することになりました。そのことについても後の話に譲ります。

この時期の工楽少年の細かな動きは分かっていません。養家宮本屋での見聞きすること、体験が、工楽少年にとって、更なる大きな港で自分の人生を試してみたいと思い出したことは確かなようです。そのきっかけは宮本屋が作ってくれました。それは寺子屋（当時の学問所）への入講でした。

宮本屋としても、後を継ぐ男子にはそれなりの教養は必要と考えていました。高砂には寺子屋が六ヵ所あり、一四〇人近く在籍する寺子屋もありました。現在のように夢や学力を大切にする教育ではなく、儒教教育を中心に、親に孝行、姫路藩に忠誠を尽くす教育が中心でした。士農工商の身分制をサポートする教育、そろばん教育（実務教育）が主でしたが、工楽少年は、そこから自分の才覚や観察だけでなく、学ぶことの大切さを知りました。また、そこから自分の才覚を活かせる場所をもっと大きな港を持った兵庫津と漠然と考えていました。

また、寺子屋では多くの出会いがあり、他の子ども達との交流をあまり意識しなかった工楽少年も、学ぶ仲間として、同世代の仲間を大事にすることを覚えていきました。そんな中で、こんなことが起きたことが予想されます。

高砂町は瀬戸内海の海運、加古川の舟運で栄えていて、その物流の流れにともない、多くの文人や有名人が来るようになっていました。そして高砂文化ともいえる文化が栄えました。

地元の住人にとって、聡明すぎる工楽という少年、まして、宮本屋に養子で入った工楽少年は有名でした。その性格も含めて、一風変わった少年は受け入れられていました。その自由な気風は、住民に対して武士階級が極端に少なかったからだといわれています。加古川から高砂川に出入りする川船の管理の「津留穀留（つどめこくどめ）御番所」と百間蔵に収納される年貢米を管理する「おたや」、高砂川の下流にあって舟の出入りを管理する「川口御番所」の三ヵ所に、夜勤担当も含めて二七人ほどの武士がおりました。この番所は、今でいう市役所の役目も果たしていたといいます。姫路藩の出張所といった機能も併せ持っていました。

そのため、通いの武士役人もいましたし、高砂に住んでいた武士役人の住まいもありました。私たちが想像する武家屋敷とは異なり、それよりも遥かにに小さな番所屋敷がありました。

当時、番所屋敷の子ども達も人数が少ないこともあり、同じ寺子屋に通っていたと考えられます。高砂在住の武士の子は、姫路藩のひざ元の、遠い別の藩校に通うことはできませんでした。その子ども達は士農工商の身分制度の中で、地位は高いものが保たれていましたが、経済的には豊かとはいえませんでした。勢い、数の少ない番所屋敷の子ども達は権威のみを振りかざして、周りの子ども達からは一目置かれながらも、嫌われていました。

合理的で科学的な目を持った工楽少年とは合うはずがありません。実は、工楽少年は、豪胆でもありました。後年それが分かる場面が出てきます。その番所屋敷の子どもとうまくいかなかったのでないでしょうか。

後年、『工楽家文書調査報告書。以下、工楽家文書』が整理された時に、何らかの理由で工楽少年が高砂におられない理由があり、当時兵庫で最も栄えていた兵庫津に行ったことが記されています。

作家の玉岡かおるさんは小説『帆神』で高砂を代表する大旦那の娘と工楽少年恋仲になり、それで高砂におられなくなった。その後、大成した工楽松右衛門が没落したその娘の生活を支援するように描かれています。皆さんはどう思われますか。

いずれにしても、工楽少年にとって、兵庫津への旅立ちは、苦い旅立ちだったようです。ところがそのことが、日本一の工楽松右衛門を生み出すことになります。人の運命は分からないものですね。

この部分をよく「家出」と書かれるのですが、養父・宮本屋長三郎は、兵庫津で困らないように船具商・鍛冶屋善兵衛を奉公先として紹介しています。養父は、高砂から離れざるを得ない大事な息子に、露頭で迷うようなことはさせなかったのです。ですから、「家出」というなら養家宮本屋公認の「家出」ということになります。

この公認の「家出」をしたのが、十五歳か、二十歳かで、また意見が分かれていますが、ご子孫の方に聞くと当時の年齢からいうと十五歳と推定されるとのことです。私もそう思います。

四、船乗り・工楽松右衛門

兵庫津に着いた工楽少年は十五歳として、当時では青年期相当の年齢なので、これからしばらくは工楽青年と呼びます。その身柄を津西出町、船具商・鍛冶屋善兵衛に預けられ、そこで奉公するはずでした。兵庫津に行った当初は、そこで仕事をしていました。ここで工楽青年には、ラッキーなことがありました。生まれた時から工夫を楽しむ工楽青年です。鍛冶屋は船具商です。船具・船大工の道具がいくらでもありました。工楽青年は目を輝かせました。仕事を通して、いろんな船大工道具を触れられたのです。それは、それは嬉しかったと思います。

ところが、またもや彼に大きな人生の変転が起きます。それが彼の未来を作り、成功へ導く運命の出来事でしでした。

兵庫津は良港として栄えていましたが、そこには幕府も一目を置く北風家が代々栄えていました。工楽青年が兵庫津に行った時、北風家当主は北風宗右衛門（そうえもん）貞幹（さだもと）でした。北風宗右衛門は代々襲名（しゅうめい）しています。北風家は兵庫津に寄港する廻船の荷主、船頭、船乗りに至るまで、お抱え屋敷で泊め、入口の側に大風呂を設け、自由に入浴させ、台所で食事を提供し、銚子一本を添えて、無償で接待していました。さらに船中に病人がでれば、これを看護し、息を引きとる者がいれば、丁寧に供養するなど無償でしていました。ですから、本来は異なる港で泊まるはずの船が、わざわざ兵庫津に入港し北風家の接待を受けていました。

北風家家訓には「荷主、船頭、水主（かこ・船乗り）働きなど、身分を問わず船に乗る者を大切にせよ」という気風、「無償の愛」というべき家訓がありました。そのことは結果として、豪商北風家の繁栄と、兵庫津の繁栄とを約束しました。

船頭、各地の豪商たちも、情報が飛び交う兵庫津で商売の交渉事をするようになりました。新人の船乗りたちも「北風の湯へ行ってこい」と言われ、そこがデビューの場になっていました。また、そこで働くお女中さんも、化粧をしすぎて、先輩お女中に怒られるという場面もありました。とにかく、北風の湯は活気が渦巻いていました。

工楽青年も、船具商鍛冶屋に奉公に行きましたが、鍛冶屋は船具のみでなくのみではなく、身近な賃積みの船は持っており、その船の扱いはしていたようです。その関係で工楽青年が北風の湯に登場することとなりました。デビュー戦です。

相撲取りに匹敵する体格で、聡明な工楽青年は、目立つ存在でした。その青年を北風貞幹の知る所となりました。北風貞幹の妻は高砂出身でした。高砂の養家宮本屋から事前に「北風様に会ってこい」と言われていました。工楽青年は、縁故を頼って良い道を歩むことを好みませんでした。ですから、北風の湯にデビュー戦を飾ったのが比較的に遅かったといわれています。

しかし、北風貞幹の目は、才能ある工楽青年をすぐに射止めました。それだけ人を見ぬく目を持っていました。その後、工楽青年は、北風家に可愛がられることになります。

これは松右衛門五十九歳の時のことですが、幕府の命で択捉（えとろふ）島（日本の固有の領土・北海道の北方）に港を開港するにあたり、兵庫津なかんずく、北風家に指名がありました。北風家は迷わずこの困難な仕事を松右衛門に託することにつながりました。

工楽青年は最初、奉公先の鍛冶屋の船具商の仕事をしていましたが、北風家から推薦があり、住まいは鍛冶屋の家で、仕事は兵庫津の豪商にも数えられる御影屋平兵衛（みかげやへいべい）の船乗りになっていました。

驚くのですが、松右衛門十八歳の時に、既に御影屋平兵衛の新造船で、故郷高砂に凱旋航海していることです。十五歳で兵庫津に出てきて、わずか三年です。これには故郷高砂の実家・釣屋善三郎や養家・宮本屋長三郎も大喜びしました。

これを見ていると、工楽青年は舞台が大きくなればなるほど、「燃える闘魂」ともいうべきものを持っ

ており、それにふさわしい行動に物おじせずに飛び込んでいけるものを持っているようです。

また、二十五歳の時に、船頭として除夜の日に、当時の迷信「除夜に船を出すと難破する」という船出禁止を犯して、讃岐（四国）方面に船を出しています。船の持ち主の御影屋も船乗りのタブーを知っていますので、工楽青年を信頼して、その指揮に任せました。

工楽青年は除夜に、船乗りたちの不評を買ってでも迷信を打破したいと行動に出ました。船乗りたちは工楽船頭に選ばれて、船に乗ったのですが、生きて帰れないと本当に信じていました。そこに工楽船頭の桁違いのリーダーシップを感じます。皆さんも生きて帰れないと信じていたところに行きますか。船乗りたちは工楽船頭を信じてついていきました。そこで工楽青年が船頭として取った行動が、評判を呼んでいます。

船乗りたちは難破すると信じていましたから、中位の波だったようですが、幻想で「巨大な波の山が襲（おそ）って来た」と言いました。工楽船頭にはそれが見えませんでしたが、「巨大な波の山があるなら、波の谷があるはず、そこを行け」と命じました。そうこうするうちに、船乗りたちの気持ちが収まり、また、迷信から目が覚めて、無事に讃岐に行くことができました。

この場面は、紙芝居『工楽松右衛門物語』や司馬遼太郎氏の『菜の花の沖』でも、工楽青年の考え方とリーダーシップをあらわす良い例として取りあげられています。船乗りの考え方を頭から否定するのではなく、取り入れて、対応の仕方を返しています。乗った船乗りたちの工楽船頭に対する信頼の深さを知りました。それだけ、工楽船頭は兵庫津でも信頼をされていました。

工楽青年は御影屋で頭角を現し、押しも、押されぬ船頭として、評価を高めていきます。この間に、奉公先の鍛冶屋の娘ツネさんと結婚します。

この間、工楽船乗り・工楽船頭がどこどう動いたのかが分からないところがあるのです。それが近年、各港の宿泊名簿が発見され、徐々に明らかになりつつあります。

松右衛門が住んでいた兵庫津は太平洋戦争の末期、空襲に遭い、全てといっていいほど燃え尽きてしまいました。そのために、工楽に関する建物、資料も灰となってしまいました。戦争ほど悲惨なものはない。戦争ほど文化と歴史を壊すものはありません。その戦争が今もウクライナで起きています。

この時期の細かいことは今後の研究にお任せするとして、特筆すべきエピソードをいくつかあげます。

①「その志は無欲であって、全て後の人のためになることだけに、一生涯心を砕いた人であった」（大蔵永常著「農具便利論」より）と。松右衛門がお世話になった兵庫津の繁栄の基礎を築いた廻船問屋北風家の家訓「荷主、船頭、水主（船乗）働きなど、身分を問わず船に乗る者を大切にせよ」に松右衛門は影響を受けたと思われます。これが松右衛門の一生に通じる姿勢「世の発展のために全てを捧げる」につながりました。

②「人として生まれてきたのなら、世の中が豊かになることを工夫しないで、ただ過ごすだけでは鳥や獣より劣る。世の中の便利というものを追求するために、発明を考えないなんてことがあろうか。」（同上①より）とあります。これは松右衛門自身の言葉です。大切な言葉なので、ジュニアの皆さんに難し

いかもしれませんが原文も載せておきます。飛ばし読みしてくださってもかまいません。「人として天下の益ならん事を計（はから）ず、碌々として、一生を過ごさんハ禽獣にもおとるべし。凡（およそ）其利（そのり）を窮（きわむ）るに、などか発明せざらん事のあるべきやハと」。

③この時期に工楽松右衛門より二十六歳年下の高田屋嘉兵衛が明和六（一七六九）年、淡路国津名郡志本村（現洲本市五色町都志）で生まれています。将来ある若者として松右衛門が期待し、援助を惜しまなかった嘉兵衛です。嘉兵衛の依頼で築いた箱館港、箱館ドックを、最晩年、高田屋嘉兵衛兄弟に売り渡しています。

④姫路藩の依頼により、松右衛門が秋田から大坂へ大きな丸太五本運びました。大きさは切口の直径が一五〇㌢ある程の丸太です。船に乗せて運べないので、筏（いかだ）方式にしました。そしてその上に帆を張り、船室まで作りました。そこに「姫路の五本丸太」と旗を立てて航海したものですから、大評判になり、港々に見物客が押しかけました。

一方、幕府の姫路藩でも大問題になりました。庶民の松右衛門が姫路藩の名前を使った幟（のぼり）を立てて航海したのです。この問題は当時の姫路藩主酒井侯の「姫路藩の名前を上げた」との英断で、藩主がその豪胆をほめることにより、一件落着しました。聡明な松右衛門ではありますが、そういう豪胆な一面があります。錦絵に「船頭工楽松右衛門」が描かれるようになりました。

⑤松右衛門は、「なかなか力が強く、相撲取り以上の体格で、常に黒岩関とよく気が合って、飲み食いを共にしていた。一日一升五、六合の飯を食べ、酒も二升ほど飲んでも平気だった」（『西摂（せいせつ）大観』より）とありますが、当時交渉ごとの席に酒が付きものでした。松右衛門はその酒で一度も負けたことがありませんでした。大男で酒も強かったことが伺えます。そのことが船乗りという過酷な仕事と相まって後年、松右衛門の身体を痛めるもとになりました。相撲取りで横綱白鵬（現宮城野親方）がいましたが、松右衛門は体格も顔も似ています。

⑥「松右衛門は北国（ほっこく）でけや木の大木を用意し、輸送するための特殊な船を作っていた時に、京都の本願寺が大火のために焼けてしまいました。けや木を欲しいとの依頼が松右衛門の元に届けられました。松右衛門は、その木を、海を通し、川を遡上して、本願寺まで届けました。お寺がお礼をしようとしましたが、松右衛門は、『元より寄付しようとの心でしたこと』と言って、一切受け取らずに帰ってしまいました」（同上①より）。このことは、終生、松衛門にその姿勢が伺えます。最晩年、鞆の浦の堤防の延長工事の時も、途中、福山藩がお礼をしようとするのですが、一切受け取りませんでした。

⑦「工楽翁」とありますので、少し時代が異なる時期でありますが、ここに書いておきます。「舶来もの（宝物）を積んだ船が沈んで、工楽翁に助けを求めました。翁は古い鯨網で、大あらめの網に仕立て、それで沈没船を覆い、陸（おか）ろくろで引き上げました。舶来ものが落ちることなく全て引き上げました。船頭が喜んで礼をしようとしたが、工楽翁、『船に乗る者、船の禍はお互いさま』として、一切受け取らなかった」（同上①より）とあります。同時代人の大蔵永常氏の証言ですし、二代目の工楽

に聞いて書き留めています。

⑧この時期に松右衛門は多くの親族を相次いで亡くしています。その悲しみが偲ばれます。実父・釣屋善三郎（工楽二十七歳時）、実弟・釣屋市三良（二十九歳時）、実母（三十歳時）、義父・鍛冶屋善兵衛（四十三歳時）、そして妻ツネ（四十四歳時）です。この間、松右衛門には子供がいませんでしたので、二代目の工楽の名を継ぐ子が義弟・宮本屋徳兵衛と妻ヨネとの間に長兵衛として誕生します（四十一歳時）。その後、松右衛門は新潟出身のヤチと再婚しますが、そのヤチにも先立たれています（五十六歳時）。

五　世紀の大発明「松右衛門帆」

世紀の大発明である「松右衛門帆」はどうして生まれたのでしょう。松右衛門が四十二歳ごろのことです。子どもの頃から工夫・発明が得意だった松右衛門ですが、この兵庫津に来てから北風家にお世話になり、北風家の家訓「荷主、船頭、水主（船乗）働きなど、身分を問わず船に乗る者を大切にせよ」との公の精神は松右衛門にも大きな影響を与えました。まして、当主北風貞幹の奥さんが高砂出身です。それゆえに可愛がられたところもありましたが、それ以上に、当主である貞幹は、松右衛門の才能を見抜き、その才能を可愛がりました。

松右衛門はいつも、「人として生まれてきたのなら、世の中が豊かになることを工夫しないで、ただ過ごすだけでは鳥や獣より劣る。世の中の便利というものを追求するために、発明を考えないなんてことがあろうか」と自身でも言っていました。それほど、周りを観察し、気が付くことに対して改良を加えていました。

その一つが帆船の重要な要素である「帆」です。当時、すでに木綿の帆はあったのですが、薄くて、破れやすく、水を含むと中々乾きませんでした。その木綿帆を重ねて使っていましたが、風をうまくつかむことができず、スピードがでませんでした。まして、積み荷で船が重たくなるとなおさらです。そこで、工夫の松右衛門は、その改良を何としても実現したいと思いました。松右衛門の故郷高砂を含む播州は木綿の産地で、薄い布の織り手はたくさんいました。その織り手に織ってもらう太い布を織る織機を発明したことです。

当時、船頭、船乗りは日本海を中心にした西回り航路が主で、瀬戸内海を出て、下関で日本海に出て、敦賀、新潟、酒田、秋田などを経て、各港で商売をしながら帰ってきていました。最北では蝦夷（えど）地（現北海道）の松前・箱館で商売をして同じ航路を帰ってきていました。ということは、冬場になると日本海が荒れ、仕事が減ってきます。そこで、一年のうち、ほぼ半年、船乗りたちは、瀬戸内海、あるいは江戸までの太平洋側の航路で稼いでしました。

松右衛門はこの期間を利用し、改良や試作品の製作に当てていました。織機全体を太糸に切り替えるのは大変でした。これは改良とは言えず、新しい機械全体を作りあげたといってもいいほどでした。「新しい帆は自分の利益のためではなく、天下のために役に立つ発明だ（原文　新たな帆は我が益のた

めにではなく、天下万民を益するための発明なり）」と松右衛門は言っていますが、困難を極めました。

その理由に帆布は幅約二尺五寸（約七三、五～七五㎝）、長さは五十三尺～七十二尺（約十七～二十一ｍ）です。その帆布をつなぎ合わせるために、耳のところ（帆の端）に工夫を凝らしました。風を受けやすく、また、適度に逃がしやすくしたのです。そのことによって風を前進への動力に効率的に切り替えることができたのです。そのために、なお更、織機が複雑になりました。

松右衛門はそのために、兵庫津から離れて、故郷高砂で試作品づくりにかかっています。そして、試作品が完成してからは、北風家からのれん分けした有力船具商・喜多二平（きたにへい）宅の裏庭で商品化に向けた更なる改良を進めました。同時に、後に自分の船になる八幡丸に実際につけて確かめました。その結果が良好なのを見届けてから、生産は喜多家に譲り、播磨国加古郡二見郷（現在の明石市二見町）に工場を作り、大量生産に入りました。

この時もそうですが、松右衛門は自分が大量生産をすれば儲かるのが分かっていたのですが、喜多二平に譲り、自分はその普及に走りました。そして、「ゼニが欲しいなら工場を作れ」と言って、製法を開放しました。「松右衛門帆」は従来の帆の一・五～二倍の値段がしましたが、機能性抜群のこの帆はかなりのスピードで普及しました。喜多二平家はこの帆の販売により、巨万の富を得ました。

こぼれ話ですが、「松右衛門帆」の帆布（はんぷ）は「帆前垂（ほまえだ）れ」といって、商家の手代丁稚に仕事のエプロンとしても重宝されました。

この一連の流れの中で、松右衛門の評判は、兵庫津だけに留まらないことになりました。また兵庫津は兵庫第一の港として栄えていたため、情報発信基地として全国に松右衛門の名前が響き渡るに便利な地でした。兵庫津のリーダー北風家も支援しました。

そのころ、兵庫津の廻船問屋の御影屋ののれん分けを受けることになり、「御影屋松右衛門」として、四十九歳の時に、兵庫津佐比江新地に店を構えました。

その店は、社長工楽松右衛門を中心に、三部門体制にしていました。

第一部門は諸荷廻漕（しょかかいそう）といって、西回り航路や瀬戸内航路など、従来の廻船業の仕事です。この部門は松右衛門の義理の弟・宮本屋徳兵衛が部長でした。そして徳兵衛の弟三人が、兄を支えました。

第二部門は、帆布製造・改善関係の仕事です。販売の仕事は喜多二平に譲りましたが、全国規模に展開しましたので、その改善・修理、アドバイス等の仕事は松右衛門の会社でやっていました。部長は松右衛門が兼ねていました。

第三部門は、港湾普請（こうわんふしん）といって、港の改修などの仕事です。既にこの頃から港の改修工事を請け負っていたと考えられます。この第三部門は、当初は松右衛門が、途中から部長を宮本屋長兵衛【義弟・宮本屋徳兵衛の実子（二代目工楽松右衛門）】が担当し、係長に水京屋卯兵衛（すいきょうやうへい）と岡本屋清兵衛（おかもとやせいべえ）の二人がいました。

松右衛門がいつから第三部門の港湾普請の仕事を始めたのかは定かではありません。ただ、次の章

に出てきますが、幕府から択捉島（日本固有の領土）の港築造工事の話が兵庫津のリーダー兼豪商・北風貞幹（さだもと）に話があった時に、北風家は迷いもなく、信頼する松右衛門を推挙していますし、幕府もそれをすんなり受けて入れています。ですから、港湾普請でも既にかなり有名であったことは確かです。また、二十六歳年下の高田屋嘉兵衛も松右衛門の港湾普請の実績を元に箱館港、箱館ドッグの築造をお願いしています。

六　箱館・択捉島開拓の工楽松右衛門

松右衛門は元から工夫の人であったことは何度も書きましたが、そんな松右衛門ですから、帆の不備を革命的な「松右衛門帆」で解消しただけでなく、出入りする港や波戸（波止場の堤）などでも気が付く点が多くありました。その対策として、港・堤を工事できる松右衛門発明の特殊作業船、例えば土砂積み船、ろくろ船、底捲き船など、現在にも通じる船を発明し、依頼を受けて、その改修作業を仕事としてやっていました。

そこに幕府から兵庫津に択捉島に港を開港することの急な依頼が来ました。といってもこれは国を挙げての極めて重要な課題になっていました。そのために、詳しくは触れませんが、蝦夷地（えどち・北海道）の一部を松前藩が支配をしていたのですが、それを計画的に天領（幕府直轄の領地）に切り替え、国防対策を練りました。

その当時、大国ロシアが不凍港を求めて、南下を繰り返していました。ロシアにとっては凍らない港はどうしても欲しかったのです。ロシアの南にあるのが日本でした。

話はそれるのですが、これを書いている時に、ロシアのプーチン大統領は「旧ソ連の領地はワシのもの」（品のない言い方ですが）といった誤った幻想にとらわれて、ウクライナに侵攻（しんこう）しています。この考え方で行くと、旧ソ連が崩壊して、そこから独立した国は「全てワシのもの」ということになり、ウクライナだけの問題で無いのです。まずはウクライナを占領しようとしているのです。それと忘れてならないのが、江戸末期と同じで、プーチン大統領も不凍港を求めて、何とか南下をしようとしているのです。これはロシアの永遠の課題なんです。

話を元に戻します。もうすでに日本の「松右衛門」と言われるようになっていた松右衛門に寛政一二（一八〇〇）年、二十六歳年下の高田屋嘉兵衛から箱館港湾整備の依頼が舞い込みます。松右衛門は高田屋嘉兵衛を可愛がっていました。それが松右衛門五十七歳の時です。甥（おい）の宮本屋長兵衛と共に、松右衛門発明の特殊作業船を使って箱館地蔵町沖に港を築きます。それが一八〇一年です。

次の年（享和二・一八〇二）年の二月、北風家から推挙された松右衛門は、択捉島港湾工事のために、大坂町奉行所から招へいを受けて、持ち船の八幡丸で江戸に向かいます。

五月、択捉島の築港を命じられて、そのまま箱館を経て、択捉島に渡ります。択捉島のホンムイ湾は巨石がゴロゴロしていたのですが、特殊作業船で取り除き、大型船が安全に留められる港を築きます。

八月、御影屋松右衛門は択捉島築港の功により、「工楽」姓をもらいます。これで正式に「工楽松右衛門」となったのです。今まで、便宜上、工楽少年とか青年、松右衛門と言っていましたが、ここで正式「工楽松右衛門」になりました。五十九歳の時です。

ただし、松右衛門はその時の状況にあわせて、養家の宮本屋松右衛門、のれん分けの御影屋松右衛門、幕府の工楽松右衛門を使い分けしています。しかし、「工楽」姓については自分の「世のために」の生きざまを象徴するものとして終生、大事にしていました。

十月、この択捉島の工事は極寒のために、一時中断します。その間に幕府より慰労金として三十両（現在価格で約三百万円）を受領します。

翌年（享和三・一八〇三）年三月、箱館から再度、択捉島に渡り、ホンムイの港を完成し、箱館に寄港します、

翌年（享和四年）四月、今度は高田屋嘉兵衛から箱館にドッグ（船の修理場）を作ってほしいとの依頼を受け、箱館地蔵町沖に火に強い播磨国印南郡石乃宝殿（現・高砂市）産の竜山石を用いてドッグを完成させます。当時、船の修理には津軽海峡を渡って青森の方まで行っていました。津軽海峡は三つの海流が交差し、非常に危険な海域でしたので、船主・船頭など船関係の人々に非常に喜ばれました。

私はこの一連の松右衛門の動きを見た時、幕府が緊急の要請を出した理由も国防として重要なことが分かり、高田屋嘉兵衛の要望も船乗り全員の利益に通じると感じ、松右衛門は相当無理をして引き受けているのを感じてなりません。「世のために」一身を捧げるのが松右衛門の生き方ですが、極寒の択捉島の港工事が完成したのが満で六十歳です。当時の年齢で言えば、相当身体に応えたはずです。

七　故郷高砂湊の築港者・工楽松右衛門

択捉島の築港工事、箱館の築港工事以降、船頭の工楽松右衛門ではなく、「松右衛門帆」の工楽松右衛門ではありますが、それよりも「港湾普請の松右衛門」「特殊作業船の松右衛門」として、日本全国にその名が轟くようになりました。現在の大型辞書で見ても、工楽松右衛門は「発明家」「実業家」「技術者」が上位項目に来ています。吉川弘文館辞書だけが、「彼は本来無欲の人だったので生涯を社会のために尽くし」と大きな項目に書いています。そこに注目してくれた吉川弘文館に私は感謝しています。

松右衛門の一生を見ると、船乗り・船頭の期間が一番長かったのですが、「世のために」一身を捧げ尽くした松右衛門のその姿、精神こそ後世に残したいものです。

さて、話を元に戻します。松右衛門にとって、高砂は生まれ故郷であると同時に、養家・宮本屋一統が米騒動で取り壊しにあった土地、十五歳の時に何らかの事情で離れざるを得なかった土地、それでも「松右衛門帆」を織機もろともに開発するのに選んだ高砂の土地です。松右衛門にとって、高砂

は複雑な思い、懐かしい思い出のある土地です。工楽家子孫の方に聞くと、「この高砂から出ていった初代の工楽松右衛門に高砂の町方衆から熱烈なラブコールが起きたことが嬉しい」と言っておられたことが印象的です。この思いは子孫の方に今も生きています。

後で詳しく触れますが、高砂湊（みなと・港）がとんでもない事態になっており、高砂を代表する町方衆がこぞって、「工楽松右衛門さん、何とか高砂に帰ってきて欲しい。高砂の港が浅くなり死活問題になっている。松右衛門さんしかこの工事はできないのです」と松右衛門に全てを任せる証文まで書いて松右衛門を招へいしています。

択捉島に港を築いた時からいうと足かけ七年ほど蝦夷地での御用（幕府の仕事）に関係しました。文化四（一八〇七）年に幕府の仕事を終えることになります。松右衛門は兵庫津に戻り、佐比江新地（さびえしんち）を拠点に諸荷廻漕関係、帆布関係、港湾普請関係の仕事を営んでいました。作家の玉岡かおるさんも書かれていますが、店の者は早く帰ってきて、本来の仕事に専念してほしいと願っていました。幕府の仕事は名誉にこそなれ、全くといっていいほどお金にならないからです。松右衛門は幕府の仕事をすることが「世のため」なると考えていました。御用が終わり、本人も店の者もやっとホッとしたのもつかの間、そこに故郷高砂から便りがありました。

高砂湊ではこんなことが起きていました。加古川の上流から運ばれてきて土砂が河口で堆積し、港が機能しない危機的な状況で、高砂の舟運、海運が壊滅的は打撃を受けていました。と共に、高砂を管轄する姫路藩のこんな事情もありました。これまで左遷されていた姫路藩の家老、有能の士・河合隼之助（はやのすけ）（寸翁・すんのう）が文化五（一八〇八）年に「諸方勝手掛（しょほうかってがかり）」を仰せつけられ、藩の財政再建に乗り出していました。この時、姫路藩は収入の七年分にあたる七十三万両の莫大な借金を抱えていました。

高砂湊の改修は幕府米や諸藩の米の集積地であったため、姫路藩財政改革においても重要な事業であり、急ぐことが必要な事業でした。河合隼之介は綿の専売で、姫路藩を黒字にしただけでなく、高砂に庶民の学問所「申義堂」を建てました。

かつて享和元（一八〇一）年、幕府代官所が姫路藩に対して、幕府の年貢米を積み出す船が高砂湊に着けるように土砂浚（どしゃざら）えをするように要請したのですが、姫路藩は「人力による土砂浚えは不可能」と突っぱねていたのです。

実際、兵庫の中央部を流れる総延長九十六キロの大河・加古川河口に開ける高砂湊の改修は困難極める工事でした。そのころはまだまだ大船を沖に停めておいて、満潮時にひらた船（底の浅い船）で大船と雁木（がんぎ・階段状の船着き場）を行き来できていました。それすら困難を極めるようになりました。まさに高砂湊の死活問題にまで発展しつつあったのです。

そこで高砂の町方衆も動かざるを得なくなりました。それが文化五（一八〇八）年です。松右衛門が高砂と深くかかわるこの年、松右衛門は六十五歳の時でした。ここからも動きも、箱館・択捉島築港の時と同じように事態は月単位で動きます。

①文化四年（六十四歳）七月中旬、高砂町東宮町宮本屋長三郎邸（松右衛門の養家）で、高砂世話役連が松右衛門と実家関係の釣屋甚右衛門（じんえもん）に土砂堆積による高砂湊の窮状を訴えています。

②八月二十二日、高砂世話役連が松右衛門の示した普請案（工事計画案）に同意することを釣屋甚右衛門に伝えた上で、援助を乞（こ）う書状を松右衛門に送っています。

③高砂の全権大使、川方世話役の鍵屋源右衛門（げんえもん）、大蔵元の柴屋三郎右衛門（さぶろうえもん）・塩屋太一郎三人が、姫路藩に高砂川の浚渫（しゅんせつ・河底ざらえ）普請を願い出ています。

④文化五年（六十五歳）閏六月二十四日、姫路藩の許可を得て、高砂大蔵元の柴屋三郎右衛門を筆頭に、鍵屋源右衛門・塩屋太一郎が松右衛門に高砂川河口の浚渫を一任したいとの書状を送っています。

⑤八月末、姫路藩家老河合隼之助が高砂川河口を検分。浚渫実施を許可しています。

⑥冬季に、松右衛門が浚渫工事に着手する。

私は、この一連の流れに歴史ドラマを見ているように感じます。高砂衆の熱意、河合家老がいなければ、この事態が成立しなかったのです。

高砂衆が松右衛門に頼むにあたって、用意周到にことに当たっているのが分かります。六十四歳の松右衛門が高齢・健康の理由で断らないように、町方衆が協議の上、背水の陣を引いて臨んでいます。

こうして何らかの事情で十五歳の時に、高砂を出奔した松右衛門が、幕府より工楽の姓を賜り、高砂救済のために、大車輪の活躍をすることになるのです。こうして、高砂湊の工事は文化五年冬から始まり、文化八年に終了しました。前にも書きましたが、姫路藩が「不可能」といっていた工事です。

この工事は莫大な費用が掛かりました。姫路藩が約半額負担することになっていました。当初の見積もりでは銀二五〇貫目（かんめ）でしたが、工事当初の文化五年だけで四〇貫～五〇貫目かかっており、今後どのくらいかかるか見当のつかない、と姫路藩の大庄屋を震え上がらせるほどだったといいます。総工費は三五〇貫目となり、超過した一〇〇貫目は高砂町中全体の負担になりました。

しかし、これまでの松右衛門の動きを見ていても、この工事によって本人に儲ける意識は全くなかったです。個人の持ち出しも多かったようです。いつもの通り、「世のために」「故郷高砂のために」との意識が強くありました。また、この工事は松右衛門しか成し遂げられませんでした。

この時期に松右衛門はこんな動きをしています。文化八（一八一一）年、工楽六十八歳の時に箱館湊を、高田屋嘉兵衛兄弟に一七〇両で、翌年の文化九年六十九歳の時に同じく箱館ドッグを、一〇五両で高田屋嘉兵衛兄弟に永代譲渡しています。六十九歳で亡くなった松右衛門は身辺整理もあったと思いますし、可愛がった二十六歳後輩の高田屋嘉兵衛への置き土産もあったとは思いますが、それ以上に高砂川改修の自己資金に充てるつもりでした。

文化七（一八一〇）年八月、工楽松右衛門は姫路藩主酒井候から五人扶持（ごにんぶち）と切符金一〇両が給され、御水主並（おかこなみ）の御廻船船頭として召し抱えられます。しかし、松右衛門の体力は限界に来ていました。この仕事は代理で義弟の宮本屋徳兵衛（工樂松右衛門商店第一部門部長）が勤めています。

松右衛門は、これまでの生活基盤であった兵庫津を離れ、故郷の高砂に住まいを移し、菩提寺も兵庫津永福寺から高砂横町の十輪寺に移しました。終焉の地（亡くなる地）を意識した行動でした。ただし、お店は兵庫津に構えていました。

では、高砂湊で初代松右衛門はどんな工事をしたのでしょうか。

彼が手がけた築造物を見ると、川の流れに逆らわず、かつ、川の流れを押さえることを念頭において仕事をしたことが分かります。また、現在でもその波戸（はと・堤）が残るほど堅固に作っています。

①まず、高砂川の上流にある百間蔵（現(株)三菱製紙会社高砂工場）から河口の川口番所（現高砂町南浜町）までの約一㎞の浚渫をしました。これについては松右衛門が「百間蔵まで大船を着岸するようにします」と語った通り、大型の船も百間蔵の近くまで通船できるようにしました。川の東向かいには「東嶋」あるいは「向島」と呼ばれる大きな中洲が二つありました。これに改修を加えて、中洲側にも船を停泊させることができるようにしました。

②さらに川の土砂を浚えただけではなく、加古川の下流の所々を「盤礫（いしがき）」で修理し、杭を打ち、堰（せき）を増設しました。そして、百間蔵の上流の平岸堤（ひらぎしつつみ）の向う岸には剣先土砂除堤（けんさきどしゃよけつつみ）を築きました。これは上流から流れてくる土砂をせき留め、湊へ流さないという役目を果たしています。ただし、剣先土砂除堤は工事を始めた頃に築いたので、川を浚えた土砂で仮工事をしたのにとどまりました。

③また、百間蔵の南東部分にある津留穀留（つどめこくどめ）番所から東側へ橋を架けました。東側にある川の中洲に石垣を利用し、亀甲堤（きっこうつつみ）を作り、その上に太い板をかけることで橋とし、加古川の対岸につなげました。今の相生橋の原型となりました。その亀甲堤は湾曲（わんきょく）しており、まともに水流の影響を受けないような工夫がしてあります。

④さらに川口番所から南に約一㎞の波戸道を築きました。この波戸道は、道に家が建ったほど広さでした。その対岸に東風請波戸（こちうけはと）と、一文字波戸（いちもんじはと）を作り、高砂川の上流の港を整備しただけでなく、海側にもう一つ港を作りました。これは海岸線が下がってきましたので、その方が有利だったからです。この二つの波戸は今でも堅固で美しい姿を見せています。

「故郷高砂湊の築港者・工楽松右衛門」とこの章のタイトルにしましたが、天下の大河・加古川を相手に、まさに港を築き上げました。

松右衛門の常として、この工事でも自己の利益を求めませんでした。この工事によって高砂の町は不死鳥のように復活したのです。

八　高砂湊再生工事以降の工楽松右衛門

高砂湊の港再生工事以降について二点だけ触れておきたいと思います。

①文化六年、松右衛門は備前小倉藩より御召船（朝鮮通信使応接用の船）の建造を依頼されました。松右衛門はその船を高砂の松にちなんで「相生丸」と名づけました。本来なら船名は依頼主が作るのが常ですが、それだけ松右衛門は信頼されていました。その船を兵庫津の船大工を高砂に呼び寄せて、作らせました。当時、兵庫で一番繁栄していた兵庫津から高砂までわざわざ船大工が来ることは、松右衛門ならでの人間力の持つ技です。

兵庫津の船大工にとって松右衛門の技術の盗む絶好のチャンスでありました。建造の材料費は当然高砂で主に調達しましたので、高砂発展のためにも大いに役立ちました。高砂の船大工のレベルアップにも役立ちました。船が揺れても藩主が乗る所は二重構造になっていて、揺れないように工夫していました。

②最後の大工事・鞆の浦改修

晩年のもう一つの大工事は文化七（一八一〇）年～文化八年にかけて完成させた福山藩の鞆の浦の港改修工事です。改修工事といってもほぼ工楽松右衛門が作ったと言われています。鞆の浦の大波戸を見ると頑丈な松右衛門独特の堅固で、美しい大波戸です。高砂に残されている松右衛門作の東風請波戸（こちうけはと）と同じ作りです。その他、西波戸、鞆の浦にそそぐ芦田川改修、雁木工事などをしています。

前にも書きましたが、途中で福山藩がお礼をしようとするのですが、全く受け取りませんでした。

「これほどの人物（松右衛門）に依頼ができるのも鞆の浦が繁栄していた証」（日本遺産「福山・鞆の浦」構成文化財）と言わしめるほど、この頃の松右衛門は全国に轟く名声と、寿命との駆け引き、また体調不良との駆け引きをする毎日でした。

「海に関する全てのことは、工楽老人に教えてもらえ」（原文「海事百般、難事出来（しゅったい）すれば、工楽翁の教えを乞（こ）うに如（し）かず」）といわれるほどの工楽松右衛門になっていました。

そこには「世のために」一筋で人生を極めた松右衛門の輝かしい勝利の歴史があります。あっぱれと称賛したくなる人生の偉人がいます。儀を重んじ利を軽んじる人柄と相まって、最後の鞆の浦の普請は兵庫津の名工工楽松右衛門にお願いし、工事をした結果、今でも鞆の浦は「美しい港」で有名です。

九　勝利の人生

故郷高砂湊の港再生事業は、松右衛門にとって、大きな意味を持つものでした。故郷は誰にとっても思い入れが深い土地です。その故郷の釣屋の漁師の家に生まれ、十二歳ごろに、その才能を見染められ、長男であるにも関わらず、大店（おおだな）の宮本屋に養子に入りました。その養家一統が、農民一揆で打ちこわしに遭っており、その名誉挽回を担う羽目になりました。そのことは、松右衛門をし

て、自分の人生を自分だけのためだけに生きる生き方ではなく、「家のために」ひいては「世のために」の生き方に導きました。それが、後年どんなことがあっても「世のために」精神を堅持するための素養になりました。そして、十五歳の時に、高砂を後にせざるを得ない事情があり、離れたくない故郷に別れを告げました。

ところが松右衛門がやむなく当時繁栄を極めていた兵庫津に行くことによって運命の歯車が大きく回り始めました。人の運命は分からないものです。兵庫津の鍛冶屋の家に奉公に行きました。が、当時兵庫津のリーダー、北風家にその才能を見出され、当時兵庫津で羽振りを聞かせていた大店（おおだな）の一つ、御影屋に勤めることになりました。そして鍛冶屋の家の娘を嫁にもらい、日本海を回る北前船航路を中心に近在の海にも船乗りとして、また、船頭として活躍しました。

その間に多くの船に乗り、従来の帆船の帆ではスピードがでない、大量輸送に向かないことに気が付きました。そこで播磨が綿栽培の産地であり、綿は集荷しやすく、職工は多くいたこともあり、松右衛門開発の新織機を使い「松右衛門帆」を発明しました。

また、兵庫津の北風家の推挙により、松右衛門しか成し遂げられなかった幕府の依頼による択捉島の開港を成し遂げました。その時に「工楽」（工夫を楽しむ）の姓をいただき、その前後、可愛がっていた二十六歳年下の高田屋嘉兵衛の要望で、箱館に港とドッグ（船の修理場）を築きました。

それらの松右衛門の動きで、天下に「海に関する全てのことは、工楽老人に教えてもらえ」と言われるまでになりました。

そうして松右門がやむなく故郷を後にした高砂より、町方衆がこぞって「工楽松右衛門さん帰ってきてほしい。港を再生してほしい。全てあなたの言うとおりにします」との証文まで作って普請の依頼を受けました。工楽松右衛門という故郷の偉人でもあり、幕府が「人の手ではこの工事は不可能」といった、この世で松右衛門しか成し遂げられない高砂湊再生工事でした。それを松右衛門は成し遂げました。

姫路藩の大庄屋をも震え上がらせるほどの、とんでもない経費が掛かりましたが、松右衛門の持ち出しも多い港再生工事でした。兵庫最大の大河・加古川を相手にした戦いでした。この工事を成功させることにより、大河・加古川との戦いに勝利しました。

この時に、籍を兵庫津の永福寺から高砂の十輪寺に移しています。松右衛門にとってもこの工事がどれだけの重みのあるものであるかを本人が実感していました。また、自分の晩年をどこで飾りたいかを表す松右衛門の決意でもありました。

兵庫津でどんなに活躍しても心は故郷高砂にあり、自分の人生というより故郷輝かせるために「工楽松右衛門出生の地、終焉（しゅうえん・亡くなること）の地」に選びました。

この間、福山藩の鞆の浦工事、小倉藩の相生丸建造、その他、各地から「工楽松右衛門さんアドバイスを、工事をお願いします」との要望が多く寄せられましたが、この本ではあまりにも煩雑（はんざつ）になるので、前の二つだけにし、後は書くことを避けました。

十　工楽松右衛門の最期

晩年のこの様子を松右衛門は自分も満足したと思いますが、亡くなった実父母、養父母、奉公先の鍛冶屋の親父さん、兄弟衆、北風の旦那さんにお応えできた満足の方が大きかったと思います。ただし、相撲取りに匹敵する体格の松右衛門にも、老いの足音が迫ってきていました。この本で取り上げた一連の工事が終わったのが文化八年です。松右衛門が亡くなったのは文化九（一八一二）年です。

この年の八月一〇日のことです。松右衛門は外出中ににわかに体調を崩します。

「生洲（いけす）において発病」と『工楽家文書』にありますので、瀬戸内海や播磨灘から揚がってくる魚を扱う魚市場が集まるのが高砂町魚町です。そこで軽い脳梗塞のような症状があり、手当てをして快方に向かうように思われたのですが、手指にしびれが現れ、近所の医師が手当てをしました。更に症状が悪化し、印南（いんなみ）郡稲屋村（現加古川市加古川町）の名医に診てもらいましたが、その治療の甲斐なく八月二十二日夜十時ごろに危篤になりました。

菩提寺の十輪寺に来てもらい、念仏を唱えてもらう中で、息を引き取りました。工楽松右衛門満六十九歳、享年七十歳です。

甥であり、養子でもあり、優れた松右衛門の弟子であった宮本屋長兵衛が二代目工楽松右衛門の名を継ぐために幕府に至急の届けを出し認可されます。その死は直ちに兵庫津にいる関係の方々、御影屋、鍛冶屋、高田屋、北風家に飛脚で知らされました。

そしてそのお墓は菩提寺である高砂の十輪寺に今も静かに立っています。どこまでも「世のために」その一身を捧げ尽くした工楽松右衛門。そして、江戸末期の海運業を「松右衛門帆」「特殊作業船」「港湾造り」で発展させていった工楽松右衛門。その技術は帆船による海上輸送の時代が明治期に終わりを迎え、新たな陸上輸送の時代に入る中で一部不要のものになったかもしれません。しかし、当時の海運業界を大きく発展させ、盛り上げていった時代の革命児であったことは間違いありません。

その無私の精神、「世のために」一筋の精神は永久に消えることがなく、人の生き方のモデルとして、模範として、忘れられることは無いでしょう。また、そう願っています。時代と共に埋没させてはいけない人物なのです。

その後の工楽家は現在八代まで続き、子孫の方が正当な初代工楽松右衛門の業績を後世に残すために、尊い見直し発見の旅を今もされています。

現在、高砂の工楽家は「工楽松右衛門旧宅」として、高砂市の運営する文化遺産として整備され、公開されています。その保存整理作業中に出てきた文書類は『工楽家文書』としてまとめられ、出版されていますが、年月日不詳の文書が多く、これからも、「発見の旅」になります。

工楽松右衛門さん、あなたの「世のために」一筋の精神は永遠の旅を新たに始めています。

あとがき

私がこの『工楽松右衛門物語』の依頼を受けて、ジュニア用に書き出したのは、私の第二の故郷・高砂の偉人だからではありません。江戸末期、海上輸送が主だった当時、これほど海運業界で偉大な業績を成し遂げた工楽松右衛門ですが、現在ではほとんど無名に近い存在になってしまいました。明治中期から輸送手段が、陸上輸送が主になり、忘れられた存在となってしまったのです。

私とこの物語の主人公・工楽松右衛門と出会いは、第二の故郷・高砂であったことは、確かですが、知れば知るほど、自分の利益を考えず「世のために」生き切った工楽松右衛門を何とか知ってほしいという思いにかられました。書いているうちに更にその思いが高まってきました。

これから日本を担う若い人たちに工楽松右衛門の歩みとその業績を、「世のために」一筋に生きた人物を知ってほしいと思うようになりました。

「はじめに」にも書きましたが、工楽松右衛門に関する研究自体が発展途上にあります。まして、松右衛門の人柄・人物を描写するものは、ごくごく限られています。というより工楽松右衛門と同時代の江戸時代の農学者である大蔵永常（おおくらつねなが）が書き残したもの以外は、ごくわずかしか見られません。

「松右衛門帆」を発明し、スピード輸送、大量輸送を可能にし、港の出入りに当たり、不便なところ、改善すべきところに気が付き、「日本一の港改修王」と言われるまでに成長していきました。その名声は日本国中に鳴り響いていました。晩年の最後の最後まで、工事依頼が絶えませんでした。なぜ、そこまでに工事依頼が来るようになったのでしょうか。

松右衛門のやったことは、どれをとっても誰もがなし得なかった素晴らしい仕事ですが、これらの一切の技術をマル秘にせず、「世のために」全て公開したことです。何をするにしても損得抜きで、「世のために」の精神で取り組みました。そのために松右衛門は慕われ、アドバイスを求める人々で松右衛門の周りはにぎわいました。その業績は農業界の英雄・二宮尊徳に匹敵し、海運界の英雄・工楽松右衛門となったのです。

ところがこの本を手にした皆さんは、松右衛門を知らないという人がほとんどだと思います。研究者以外で知られるようになったのはごくごく近年です。それには理由があります。松右衛門は良いことをしても、それが当たり前でしたから、自分の名前を広めることをしませんでした。神社や寺院に寄付しても、それが当たり前でしたから、名前を書きませんでした。松右衛門の技術を持ってしかできない、また、その助けがなければお店がつぶれるような大助けをしても、一切お礼を受け取りませんでした。受け取っていれば記録として残ったのですが・・・。それどころではなく、自分を表に出さず、後輩の高田屋嘉兵衛などを立てました。だから無名なのです。しかし、同時代人には高い尊敬を受けていました。

そこでこの偉人の伝記を書くにあたって、想像をふくらませて書くといった方法を取らず、分かっていること、当時の時代背景から推測できることかを中心にこの伝記を描き上げることにしました。それが成功したかどうか分かりません。

文中の所々に「人の運命は分からないものですね」という言葉を使っていますが、工楽松右衛門の人

生を通して見ると、苦難な時が、後から見ると彼の人生の成功にいたっていることをしみじみ感じました。順風満帆の時よりも、苦難の時は大変でも成功の原因を作っています。工楽松右衛門の特徴は大変な時も「クサル」ことをしなかったことです。大変な時も常に前を向いています。そのことが大成をすることにつながっています。成功とは苦難に遭わなかったことではないのです。苦難に遭って「クサル」ことをせず、努力し続けていることです。そのことを工楽松右衛門の人生をみてきて感じさせられました。

養子にだされた時、高砂におられなくなった時、一時期に多くの親族を亡くした時、妻二人に相次ぎ先立たれた時、松右衛門は悲嘆の心を持ったはずです。それにもかかわらず、彼の動きが停まった様子はないのです。また、松右衛門には子どもがいませんでした。そのことが優れた養子つまり二代目工楽松右衛門を迎えることにつながりました。

また、「世のために」との工楽の彼の強い信念は、兵庫津に出てから確固たるものになりました。兵庫津の豪商・北風家の考え方「荷主、船頭、水主（船乗）働きなど、身分を問わず船に乗る者を大切にせよ」を参考にしたにしても、同じくお世話になった高田屋嘉兵衛にはそれが見られません。やはり工楽松右衛門の素晴らしい個性といってもいいのではないでしょうか。

「積善（せきぜん）の家に余慶（よけい）あり」（中国の古典『易経（えききょう）』）という言葉があります。「善いことを積み重ねていく家には子々孫々まで幸福がおよぶ」という意味ですが、初代工楽松右衛門の生き方が、現在八代目のご子孫の方がいらっしゃいますが、その代にまで「余慶」としてつながっているのではないでしょうか。

この物語は二〇二三年一月一七日阪神・淡路大震災より二十八年目の日に書きだし、その年の三月一一日東日本大震災より一二年目の翌日に第一次原稿が完成しました。

この時期、コロナ禍で書く時間ができるかなと思っていましたが、地域の役職やこの時期だからこそ、悩みを抱えている方も多く、そのためにまとまった書く時間は取れませんでした。最後まで書き終えるにあたり応援していただいた多くの方々に感謝します。この本は神戸学院大学教授の『工樂松右衛門伝～公益に尽くした七〇年』が出版されていないと書けないほど、お世話になりました。また、高砂公民館図書館が、パソコンの電源が使えるので、常時使わせてもらいました。ありがとうございました。

令和五（二〇二三）年三月一二日

著者　藤村　清春（兵庫県高砂市在住）

経緯

本書は堀川運河倶楽部ホームページの「運河の歴史」に掲載した工楽松右衛門物語に連載した稿をトリニティー体験テキストの郷土の歴史編として編集頂いたものです。

堀川運河倶楽部ホームページ管理者